

# Chinese Bronze Mirrors Found outside of China (1): Mongolia and Transbaikalia [2nd edition]

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-04-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Otani, Ikue メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24517/00061625">https://doi.org/10.24517/00061625</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 疆外出土中国鏡集成 (1)

## —モンゴル国ならびにザバイカル地域 [第2版]

大谷 育恵

(金沢大学 国際文化資源学研究所)

### I. はじめに

2014年に「疆外出土中国鏡集成(1)」[大谷2014]として、モンゴル国ならびにザバイカル地域で出土した中国鏡を集成してから7年が経過した。その後も匈奴の遺跡を調査対象とする発掘が毎年のように実施され、特に世界各国が調査隊を派遣しているモンゴル国ではその出土数が増加した。本稿では前版に続く第2版として、まず近年出土した資料の増補を行いたい。

草原地帯の遺跡において中国鏡が注目されるのは、実年代を知るための手がかりになるためである。匈奴の遺跡の場合には、年代を指し示すことが可能な中国製製品には鏡の他に漆器があり、また放射性炭素年代測定によって得られた年代がある。匈奴期遺跡の放射性炭素年代測定値の集成は別稿で報告するが[大谷ほか2021; 大谷[編]2021]、様々な考古資料を合わせて検討した場合、匈奴遺跡の実年代はどのように考えられるのかを本稿のまとめとして最後に提示したい。

### II. モンゴル出土の漢鏡

#### 1. ノヨン・オール遺跡

ノヨン・オール遺跡(表A-1~2)の概要は前版に記述したとおりである。2006年から蒙露共同調査で発掘された20号墳から鏡が出土していることはトルバト論文[Törbat2011:320]で指摘されており、その情報は前版に加えている。その後20号墓の報告書が刊行されたものの、未だに図は公表されていない。二槨一棺の棺内で「8. 鏡(?)」と指摘があるのを確認できるのみである[Polos'mak et al. 2011: 70, 図2.45]。

そして、同じ蒙露共同調査で2012年に発掘された22号墳からは、四乳四虺鏡が出土している(図2-1)[Polos'mak 2013; 2015]。

#### 2. ドーリク・ナルス遺跡

ドーリク・ナルス遺跡(表A-5~9)の概要は前版に記述したとおりである。2014年に報告書[大韓民国

国立中央博物館ほか2014]が刊行され、1号墳とそれに伴う11基の衛星墓の内容が公表されたことにより資料数が増加した。鏡が出土したのは3基の衛星墓である。

西側第1衛星墓(W1)の鏡は棺内で出土した。銘帯鏡で、主文区の銘文は“田”字形の文様と渦文を交互に字間にはさむもので、「下大明」である(図2-5)。

西側第3衛星墓(W3)<sup>1</sup>の鏡については、前版で木槨の上に乗った状態で出土した出土状況写真を収録していたが、実際には2片が出土していた。W3号墓は長方形の墓壇の中に馬1体と棺とを並列安置した構造の墓で、鏡は棺内で被葬者に伴って出土したようである。2片は同一個体と推測されており、銘帯鏡である。図2-6左鏡片の銘文は左下から上に向かって「(“田”形の文様)明(渦文)見(“田”形の文様)日」で、「見日…明」である。

南側第2衛星墓(S2)の鏡は、銘帯鏡の小片である。一棺一槨の内部構造の墓で、木槨壁を除去して発見された頭蓋骨下で見つかったという。銘文字はi字体に相当するゴシック体で、「而[而]」である(図2-7)。

#### 3. オラーンハナン遺跡

オラーンハナン遺跡(表A-10)は、考古学研究所の「匈奴の都市、生産史研究」班の調査隊によって2019年に調査され、2基の墓が発掘された。速報によると2号墓より鏡が出土しているが、鏡式ほかは現在判断できない(図2-10)。

#### 4. イフ・ノーロゴト I 1号墓

イフ・ノーロゴト遺跡(表A-14)は2019年にウランバートル大学の調査隊によって調査された遺跡である。遺跡はI~VIに区分され、合計6基の匈奴墓を調査している。69基の墓が存在するI遺跡では、3基の墓を調査し、1号墓から青銅鏡片が出土したという[Iderkhangai et al. 2019: 307]。

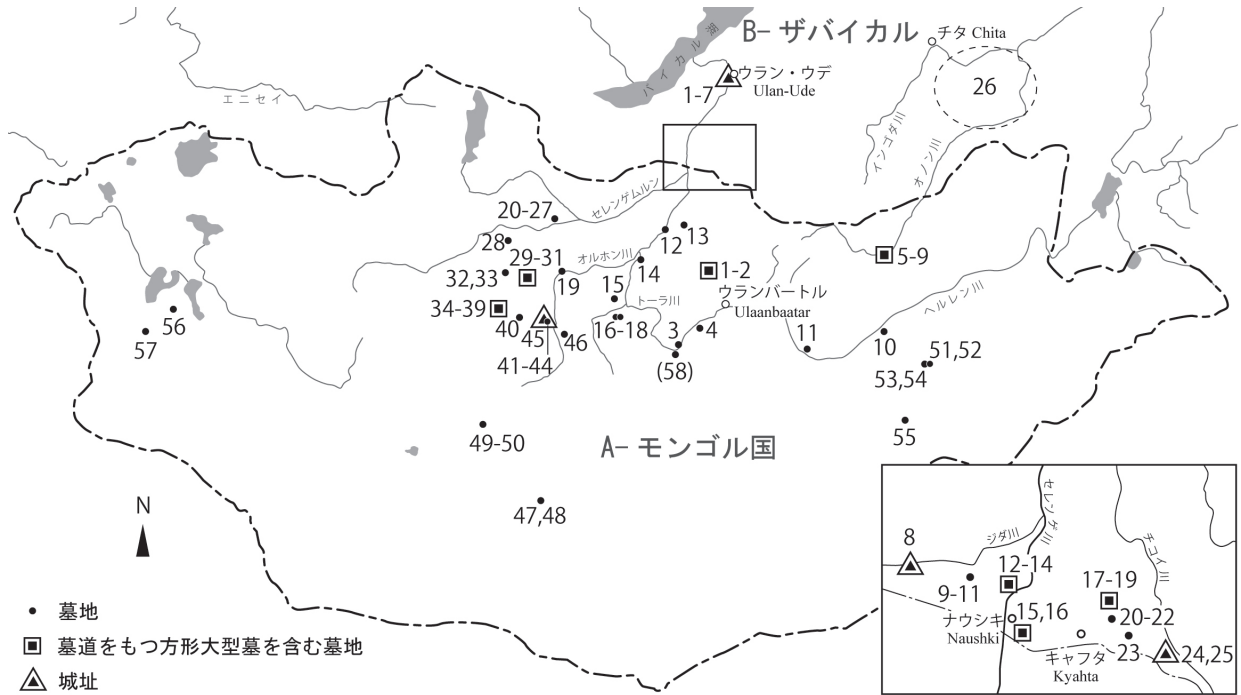


図1 中国鏡が出土した遺跡

### 5. エルスト・アル遺跡

エルスト・アル遺跡(表A-16,17)は調査速報しか出ていないため詳細を知ることができないが、モンゴル科学技術大学を中心とする調査隊によって匈奴期の墓が2011年に7基、2012年に6基調査されたようである[Banchigdash 2012]。速報展が開かれた際に2点の鏡片が展示されていた。2点は同一個体の可能性もあるが、出土した墓番号など詳細は不明である。

1点目は銘帯鏡で、「:」から以下、「内而清而以而[昭]…[而]」の文字が確認できる。文字は硬化したゴシック体である(図2-16)。2点目はあまり幅のない平素縁で、櫛歯文圏と内区の一部までが確認できる(図2-17)。

### 6. ビシレルティーン・アム遺跡

ビシレルティーン・アム遺跡(表A-18)は上記と同じモンゴル科学技術大学によって2014年より調査が開始した墓地で、以降2016、2018年と調査が行われた[Erdenebold et al.2018]。速報によると、9号墓で鏡が出土した。おそらく円座鈕で、その外に平頂素圏帯、四乳の間に斜角雷文を配置した主文区、平素縁の鏡である(図2-18)。

### 7. バローン・モフダグ遺跡

バローン・モフダグ遺跡(表A-19)は257基の墓

が4群に分かれて分布する匈奴墓地である。2007年にモンゴル国立大学が調査した5基の墓の概報が出ており、143号墓から鏡片1点が出土している[Bat-Erdene2014]。

143号墓は直径約8mの円形積石墓で、墓壙の中に板石で石棺状に作った中に木棺を安置し、石棺外の被葬者頭側を副葬空間として利用する構造の墓である。鏡片は棺内で出土した。鏡片の外区文様は流雲文で、内区文様は確認できないが規矩鏡であると考えられる(図2-19)。

### 8. サルヒティン・アム遺跡

サルヒティン・アム遺跡(表A-28)には、90基あまりの遺構が存在するという[Ölziibayar et al. 2012]。匈奴部分は報告書[Ölziibayar et al. 2019]が刊行されており、2010年にはモンゴル国立大学、2011~2012年には科学アカデミー歴史学研究所が発掘調査を実施し、合計35基の墓が報告されている。

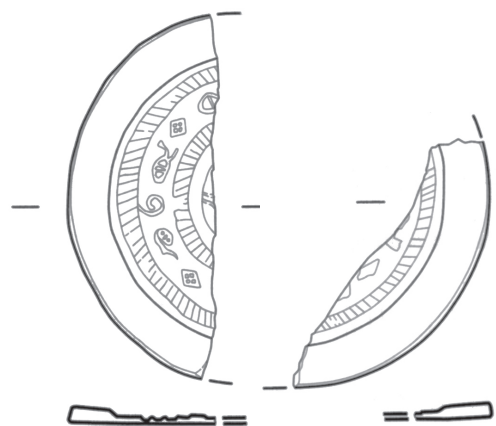
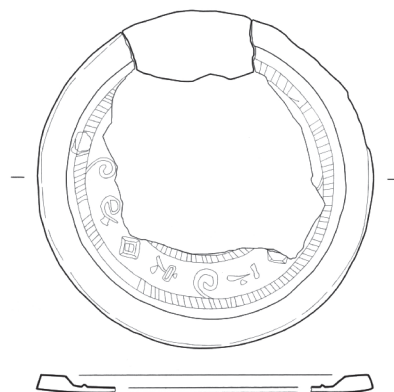
鏡が出土したのは7号墓である。7号墓は長方形の竪穴土坑長辺側に洞室を設けた側洞墓で、鏡は側洞室に安置された被葬者頭側の龕より土器等と共に出土した。鏡はヒ縁渦状虺文鏡である(図2-28)。廣川[2009]のこの鏡式の鏡の検討に従うと、主文様c類(C字を2つ逆方向につないだS字鉤状)、地文は平行線文(平行線で構成されるもの。岡村・雷文c)にあたる。



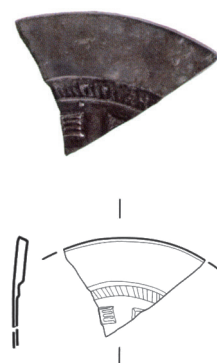
1. ノヨン・オール 22 号墓



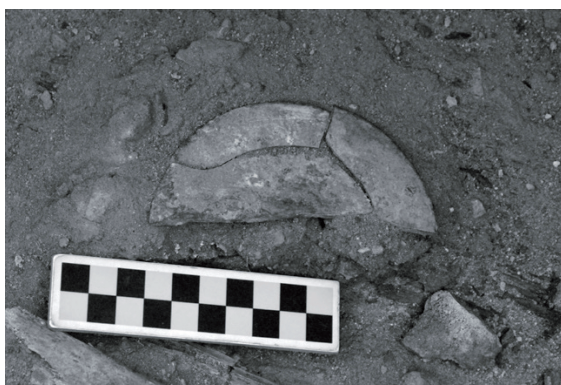
5. ドーリック・ナルス 1 号墳 W1 衛星墓



6. ドーリック・ナルス 1 号墳 W3 衛星墓



7. ドーリック・ナルス 1 号墳 S2 衛星墓



10. オラーン・ハナン 2 号墓



16,17.  
エルスト・アル墓地



18. ビシレルティーン・アム 9 号墓



19. バロン・モフタグ 143 号墓



28. サルヒティン・アム 7 号墳

図2 漢鏡集成(モンゴル国4)





36. ゴル・モドⅡ5号墳



37. ゴル・モドⅡ189号墳  
第8号衛星墓



38. ゴル・モドⅡ189号墳  
第11号衛星墓



45. タリン・ゴルワン・ヘレム  
I城址, 1A土壇



49. ソヨオ・フレン2号墓



39. ゴル・モドⅡ189号墳  
第12号衛星墓



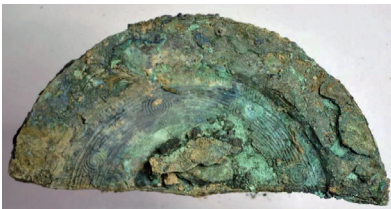
46. ホタグ・オール59号墓



52. エンゲリン・ボーツ3号墓



53. イフ・フングイン・アム3号墓



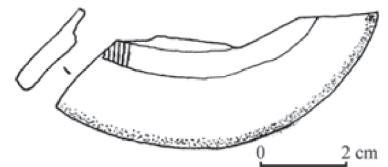
50. ソヨオ・フレン遺跡



54. イフ・フングイン・アム4号墓



55. チャンドマニ・ハル・オール  
217号墓



56. シャーハル・トルゴイ1号墓

図3 漢鏡集成 (モンゴル国5)

## 9. ゴル・モドⅡ遺跡

ゴル・モドⅡ遺跡(表 A-36~39)の概要は前版の通りである。2001年に遺跡を発見し、まず同墓地最大の1号墳全体の調査を目指して2002~2010年に1号墳に伴う衛星墓群30基、2011年からはウランバートル大学によって1号墳主墳が発掘された。同隊は5号墳と16号墳第1衛星墓についても同期間に発掘している。その後は蒙中共同調査によって2017~2019年には189号墳とそれにも伴う12基の衛星墓、2019年には10号墳と調査が継続している。1号墳の衛星墓群から出土した2点の鏡については前版で報告しており、その後報告された4点の資料について追加する。

5号墳は約11×10mの方形積石墳丘に墓道が付属したT字形墳である[Erdenebaatar et al. 2015]。鏡片は連弧文が確認できるが、鏡式は特定できない(図3-36)。

189号墳は約30×29mの方形積石墳丘に墓道が付属したT字形墳である。東側に12基の衛星墓を伴っており、このうちの3基から各1点の鏡が出土した[河南省文物考古研究院2018]。

8号衛星墓出土鏡は連弧文銘帯鏡片で、硬化した字体で「[而]内而清而」の文字がある(図3-37)。

11号衛星墓出土鏡は被葬者の頭部右側やや上の位置から出土した。規矩鏡片で、外区は複波鋸歯文帯(鋸歯+複線波文+鋸歯)、内区にVとT、そしてそれら文様間に配置された乳を確認することができる(図3-38)。

12号衛星墓は被葬者腰部以上は残存状況が悪いとの記載があるものの、鏡は頭部側に近い棺内で出土している。規矩鏡片で、外区は流雲文、内区にVとL、そしてその間に配置された玄武、乳(?)を確認することができる(図3-39)。

## 10. タリン・ゴルワン・ヘルムⅠ(ヘルメン・タルⅠ)

河谷平原に3基の土城が存在することから「平原の<sup>タリン</sup>3つの城址」と呼ばれる土城群で(表 A-45)、蒙米共同調査[Purcell&Spurr2006:27-29]の後、2014年から蒙中共同で発掘調査が行われている<sup>2</sup>。土城には西から東にⅠからⅢの番号が振られており、鏡は西城址(Ⅰ号城址)で出土した。

西城址は北457m×東414mの土城で、土城壁内側にいくつかの高まりがある。中央の1A土壇とその南にあるやや小さな1B土壇は盛り上がった道路状遺構

でつながっており、その部分がトレンチ調査あるいは版築層範囲を確認するために平面調査されている。1A土壇上には後代の墓が1基が存在したものの[内蒙古自治区文物考古研究所ほか2015; 大谷2021]、鏡はその墓の北の位置でいかなる遺構とも無関係に出土した[Ochir et al. 2019: 171]。鏡片は銘帯鏡で、「而以而[昭]而夫而」の文字を確認できる(図3-45)。

## 11. ホタグ・オール遺跡

ホタグ・オール遺跡(表 A-46)はオルホン川の流れて沿って広く広がる河谷傾斜地に形成された約120基の遺構が確認される遺跡で、4遺構(No. 72、79、90、44?)についてはセル・オドジャブがかつて調査したものという<sup>3</sup>。2009年にモンゴル・カザフスタン歴史文化調査団が同墓地を調査地を選び、ホタグ・オールⅡと共に調査している[Samashev et al 2016: 183]。鏡は59号墓で出土した。

59号墓は直径約5m環状の積石が確認できる円形積石墓で、長方形の墓壙の短辺片方側を副葬空間として使用できるように木棺を配置した内部構造である。鏡は木棺レベルから出土したが、報告者は盗掘の影響を受けて移動していると考えている[Samashev et al 2016: 191]。鏡は流雲文の外区から内区外側の斜線の櫛歯文圏までしか確認できないが、外区文様からみて方格規矩鏡と推測される(図3-46)。

## 12. ソヨオ・フレン・オール遺跡

ソヨオ・フレン・オール遺跡(表 A-49,50)は、モンゴル国立大学人類学・考古学科と中国吉林大学考古学系が2019年度に共同調査した遺跡で、様々な時期の遺構12基を調査している。遺跡はⅠ区とⅡ区に分かれ、匈奴に関してはⅠ区で5基の匈奴墓を発掘した[Batsaikhan et al. 2019]。

鏡が出土したのは2号墓で、長方形墓壙の一方の短辺に設けた副葬空間から獣骨などと共に出土した。鏡は幅広い外縁をもつ銘帯鏡で、「而明而以」の4文字が確認できる(図3-49)。

また同調査では鏡がもう1面出土している(図3-50)。平素縁で、外区は櫛歯文圏の間に斜角雷文帯であるが、その内側の内区から鈕座文様は破損がひどく良く分からない。

## 13. エンゲリン・ボーツ遺跡

エンゲリン・ボーツ遺跡(表 A-51,52)の概要は前版の通りである。2019年に蒙米共同「東部モンゴル調査」

班によって新たに3基の匈奴墓が発掘され、3号墓で鏡が出土した [Amartlövshin et al. 2019:59]。

3号墓は7.5 × 6.5mの円形積石墓で、長方形墓壇の底に石槨を築いて木棺を安置する内部構造の墓である。鏡は木棺内の被葬者頭部左側の位置で出土した [Institute of Archaeology, MAS 2020: 26-27]。鏡は方格規矩鏡で、外区は複波鋸歯文 (鋸歯+複線波文)、TLVの文様間には獣と乳が配置されている (図3-52)。

### 13. イフ・フングイン・アム遺跡

イフ・フングイン・アム遺跡 (表A-53,54) は上記と同じ蒙米共同「東部モンゴル調査」班によって調査され、2基の墓から鏡が出土している [Amartlövshin et al. 2019; Institute of Archaeology, MAS 2020:19-22]。

3号墓は直径10mの円形積石墓で、遺構範囲清掃中に鏡片2点が出土した。鏡は平素縁とその内側をめぐる斜方向の櫛歯文のみ確認できる (図3-53)。

4号墓は直径5.9mの円形積石墓で、長方形墓壇の底に石槨を築いて木棺を安置していた。鏡は墓壇北側短壁の東側で有機質のものに包まれた状態で出土したという。鏡は「見日之光、天下大明」の銘文をもつ連弧文銘帯鏡である (図3-54)。

### 14. チャンドマニ・ハル・オール遺跡

チャンドマニ・ハル・オール遺跡 (表A-55) は様々な時代の320基の遺構からなる墓地で、うち292基が調査されている。大半は青銅器時代の墓 (172基) であるが、15基は匈奴時代の墓である。

217号墓は円形積石墓で、長方形墓壇底部の被葬者頭部からみて右手側の離れた位置から鏡片が出土した [Güncinsüren & Erööl-Erdene 2015: 169]。鏡は規矩鏡で、外区の中央に細い硬化した画像文様帯を持ち、内区のVとLの間に尾の長い獣1匹が確認できる (図3-55)。

### 15. シャーハル・トルゴイ遺跡

シャーハル・トルゴイ遺跡 (表1-56) では、2009年に蒙韓共同調査によって1基の墓が調査されている [Batbold 2017]。1号墓は直径約8mの円形積石墓で、台形の墓壇に木棺を安置した内部構造の墓である。鏡は被葬者右手側の木棺外の位置から出土した。平素縁とその内側の櫛歯文圏までしか確認できず、鏡式は不明である (図3-56)。

## III. ザバイカル出土の漢鏡

### 1. オルゴイトン遺跡

オルゴイトン遺跡 (表B-12~14) の概要は前版の通りである。前版で墓道を有するT字形墳である5号墳から出土した鏡については紹介しているが、図面は掲載していなかった。5号墳の報告 [Nikolaev & Miniaev 2017] が出たため、写真を再掲する (図4-12)。また、同墓地の発掘調査は現在継続中であり、円形積石墓の17号墓と18号墳からも鏡が出土している。

17号墓出土鏡は平素縁から銘文帯の一部までしか確認できないが、ゴシック体の漢字銘文を持つ銘帯鏡と考えられる (図4-13)。

18号墓出土鏡は外区とその内側の櫛歯文圏までの破片であり、外区は「鋸歯+複線波文」の複波鋸歯文である (図4-14)。

### 2. ツアラム遺跡

ツアラム遺跡 (表B-15,16) の概要は前版の通りであるが、7号墳木槨内に副葬されていた3体の人形に伴う鏡について情報を追加する (図4-16-1,3)。人形1と3に共伴する鏡は共に連弧文銘帯鏡である<sup>4)</sup>。

### 3. イリモヴァヤ・パジ遺跡

イリモヴァヤ・パジ遺跡とその出土鏡 (表B-17~19) については前版の通りである。ただしより良い写真図版を公表するものがあつたため、その写真を再掲する (図4-17-1,2)。

## IV. 異形の「鏡」

匈奴墓で出土した中国鏡は以上であるが、「青銅鏡」として報告されてきた資料がいくつか存在する。それは鏡であるのかも疑わしい資料ではあるが、ユーラシアの草原地帯では東の中国鏡と西の持ち手のある柄鏡とが交錯するという状況があるので、関連研究の参考のために集成しておく。

ひとまず異形の鏡としたが、その形には2種類がある。まず、アイラギーン・ゴズゴル遺跡とデルゲルハーン・オール5号墓の鏡 (図5-1,3) は形状がよく似ており、縁がかまぼこ状に厚くなり、小さな三角形の突出部が1箇所にある。そして、その舌状突出部と対称側の縁付近に孔あるいは円形痕跡が確認できる点も同じである。次にゴル・モドII 1号墳第22号衛星墓の資料は、縁付近の1か所に隆起した環状の円形文2つがある (図5-2)。筆者の認識ではこれらを柄鏡とするこ





12. オルゴイトン  
5号墳



13. オルゴイトン  
17号墓



14. オルゴイトン 18号墓



16-3. ツアラム 7号墳 (人形 3に共伴)



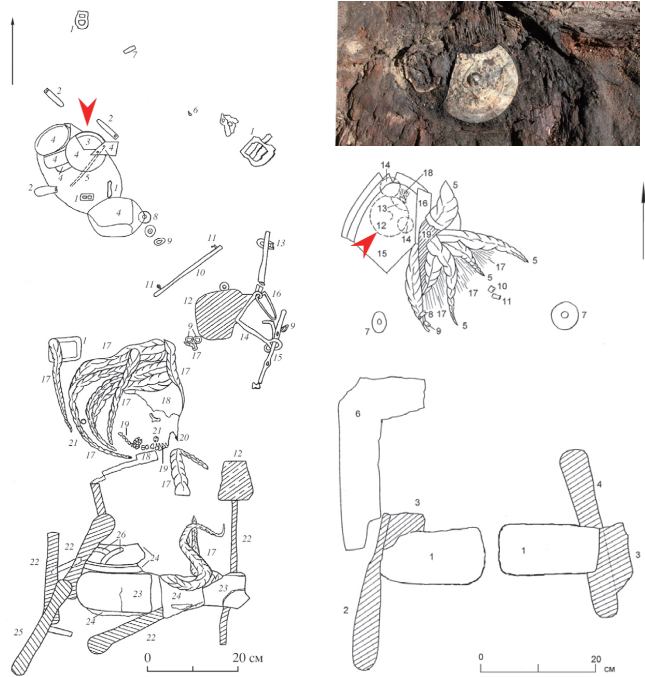
17-1. イリモヴァヤ・パジ 3号墓



17-2. イリモヴァヤ・パジ 3号墓  
図 4 漢鏡集成 (ブリヤート共和国)

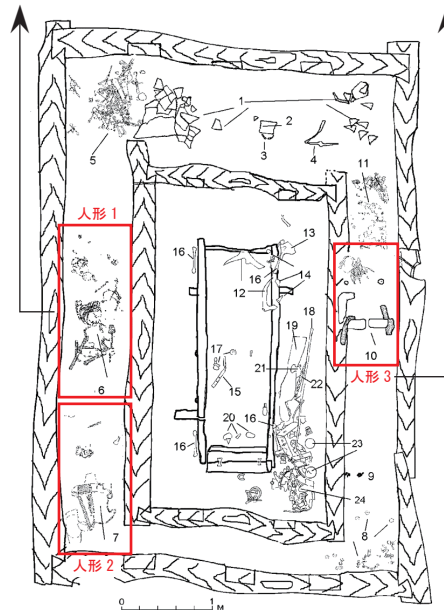


16-1. ツアラム 7号墳 (人形 1に共伴)



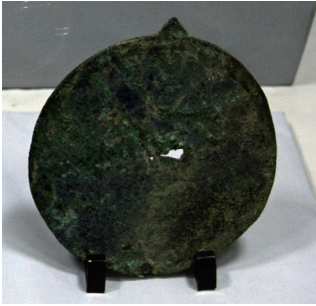
人形 1の出土状況図 (3: 鏡?)

人形 3の出土状況図 (12: 鏡)



16.  
ツアラム  
7号墳  
木槨内部





1. アイラギーン・ゴズゴル遺跡



2. ゴル・モドII号墳第22号衛星墓



3. デルゲルハーン・オール5号墓

図5 異形の鏡 (モンゴル国)

とはできず、現在のところモンゴル高原で柄鏡の出土を確認できる例はない<sup>5)</sup>。

### V. 考察：考古資料からみた匈奴遺跡の実年代

匈奴研究にとって出土鏡の分析が期待される理由は、遺跡の年代を知る手がかりとなるためである。鏡は岡村秀典 [1984; 1993] の漢鏡 I 期～VII 期の時期区分に従って分類し、その所見は表 1 に示した通りである。そして、時期ごとに面数を集計した結果が図 6 である<sup>6)</sup>。

ソ連邦からの独立以降、モンゴル国では発掘調査が活発化し、匈奴に関する考古資料は増加したが、従来の文献史料に基づいた匈奴に対する認識との間で新たな疑問が生まれている。この問題は前版V章で述べているが、すなわち、従来匈奴期は文献史料にもとづいて前3世紀末～後1世紀とされてきたが、現在のところ前3世紀末～前2世紀の年代を与えることができる匈奴の遺跡は希薄で、初期の段階が良く分からないという状況にある。今回再度集成した中国鏡の時期

別出土面数をみても、その多くは漢鏡IV期とV期に集中しており、早期の鏡はイヴォルガ城址という一遺跡に集中している。文献史料にもとづくと、漢対匈奴の勢力関係は武帝による対外積極策と西域進出によって逆転するが、近年集中的に調査された匈奴王陵に比される大型墳の年代はいずれも紀元前後交代期に集中しており [Miniaev&Elikhina2009:28] (参考1)、文献史料と考古資料との間で匈奴精強期の認識に差がある (図6)。したがって、匈奴考古学においては、この匈奴初期の遺跡の発見が課題の1つとなっており [Brosseder et al. 2011]、今後さらなる調査の積み重ねによって解決されてゆくものと思われる。

本稿は現在の状況下で検討可能な資料として中国鏡を取り上げて検討を試みたが、中国鏡から得られた年代の検証のためにも、同じく匈奴遺跡から得られるその他年代指標も加えて比較検討しておきたい。匈奴の遺跡から得られる年代指標となる資料には、中国鏡の他に、①紀年漆器、②放射性炭素年代測定値がある。紀年漆器は年代の一点を特定することができる点で貴重であるが、その年代は中国鏡と同様にその遺物の製作年であり、副葬品として埋葬されるまでに経過した時間が不明という点が弱点である。放射性炭素年代の場合は、普遍的に実施することができ、その遺構の形成年代を知ることができるという点で優れているが、その結果はあくまでも確率であり、またサンプリングの結果次第で問題が発生する場合もあるため<sup>7)</sup>、出土遺物の年代観との対照が必ず必要となる。したがって、中国鏡

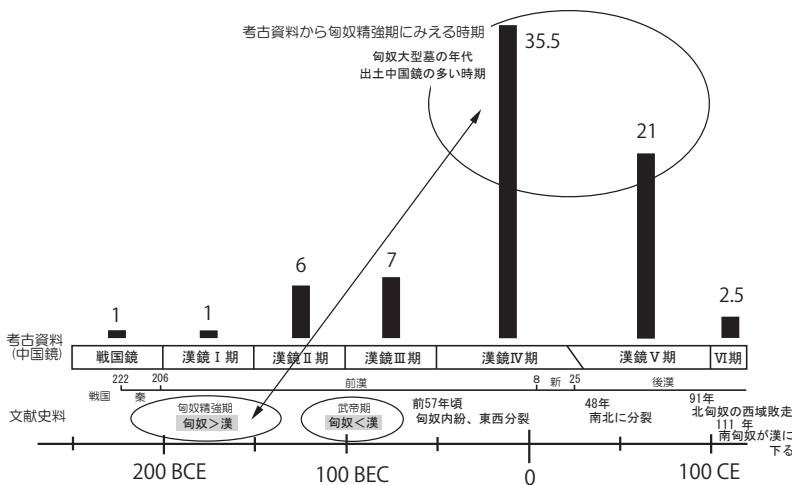


図6 匈奴の遺跡で出土した鏡の時期別面数

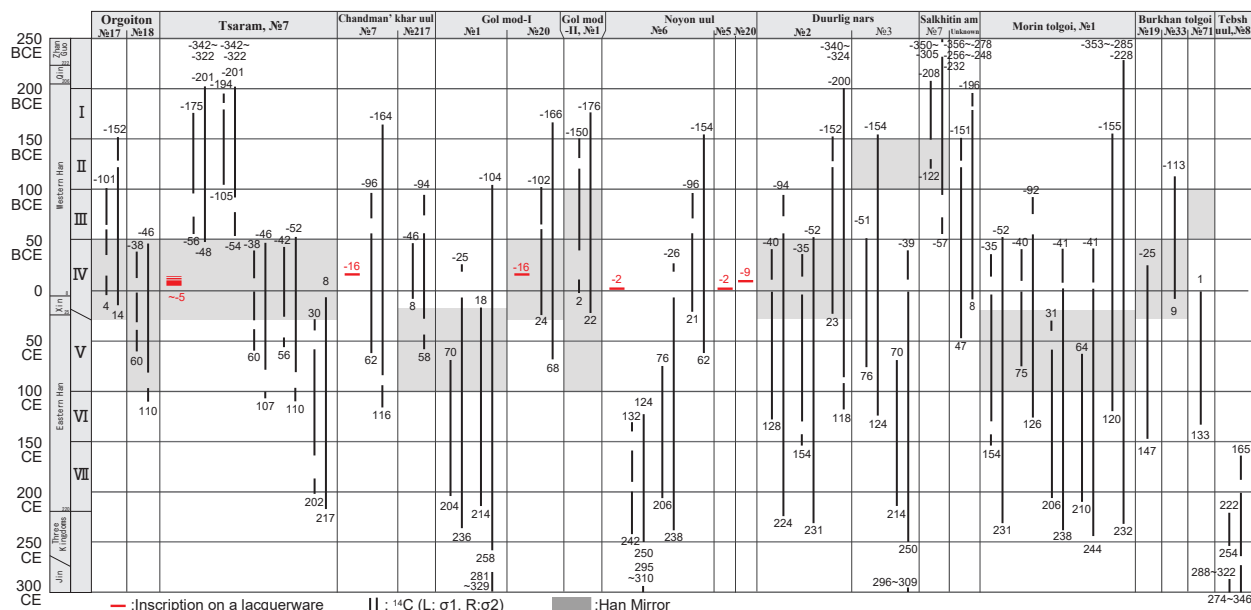


図 7 匈奴の遺跡の年代指標 (中国鏡、紀年漆器、放射性炭素年代測定値) 比較図

あるいは紀年漆器が出土しており、且つ放射性炭素年代測定を実施している遺跡について、その両者年代を比較したのが図 7 である。その結果をみると、やはり前 3 世紀末～前 2 世紀の年代を与えることができる例は希薄である。

VI. おわりに

本稿は 2014 年の第 1 版公表以降に報告された中国鏡について整理した。資料を増補した上で匈奴遺跡の年代の問題についても検討したが、中国鏡の出土面数は漢鏡 IV 期、V 期のものが多く、匈奴初期にあたる前 3 世紀末～前 2 世紀の資料は希薄である。このことは、匈奴遺跡から得られるその他年代指標とできる資料を合わせて検討した場合でも確認できる。

以下は蛇足となるかもしれないが、放射性炭素年代測定の結果はあるとしても、中国製製品自体の限界からこのような年代に見えるのではないかという疑問があるかもしれない。すなわち、物勒工名に従って銘文を刻んだ工官製の紀年漆器はそもそも前漢後期以降の作例しかない資料であるし、中国製製品の出土は匈奴大型墓からの出土数量が多いため、匈奴遺跡としては全体の一部である大型墓の年代観に引きずられていないかという疑いである。しかしながら、中国製製品のユーラシア草原地帯への拡散という視点で見た場合、モンゴル高原では前 3 世紀末～前 2 世紀の中国製製品はイヴォルガ遺跡以外ではほぼ確認できないも

の、サヤン-アルタイ地域ではこの時期の中国製製品がより濃密に出土しており [大谷 2019]、中国製製品の疆外への拡散がこの時期にはなかったということとはできない。疆外出土漢鏡集成 (2) はシベリア地域で予定しており、隣接地域についても資料の整理をした上で、草原地帯各地への拡散の動きの年代・地域的な差とその背景についても検討が必要であると考えている。

謝辞 :

本稿は日本学術振興会特別研究員奨励費 (17J08881) で調査を実施した成果です。調査も含め、本稿を作成するにあたり多くの方の協力を得ました。記して感謝いたします。

Ch. アマルトゥブシン (Ч. Амартүвшин)、L. イシツェレン (Л. Ишцэрэн)、S. オルズィーバヤル (С. Өлзийбаяр) (以上、モンゴル科学アカデミー考古学研究所)、S. S. ミニャーエフ (С. С. Миняев) (ロシア科学アカデミー物質文化研究所)、N. N. ニコラエフ (Н. Н. Николаев) (エルミタージュ美術館)、N. V. ツィデノヴァ (Н. В. Цыденова) (ロシア科学アカデミーシベリア支部蒙仏蔵学研究所)、笹田朋孝 (愛媛大学)

註 :

1) 前版で「西側第 4 衛星墓」の資料と記載していたが、報告書の刊行により第 3 衛星墓の誤りであることが明ら

表1 モンゴル国ならびにザバイカルで出土した中国鏡一覧

A: モンゴル国

	遺跡名	site	所在地	place	鏡式 type	period
	ノヨン・オール 20 号墓	Ноён уул, курган №20			未公表	-
1	ノヨン・オール 22 号墓	Ноён уул, курган №22	トゥブ県 バトスムベル郡	Төв аймаг, Батсүмбэр сум	四乳四虺鏡	IV
2	ノヨン・オール 25 号墓	Ноён уул, курган №25			細線式獸帯鏡	後漢
3	モリン・トルゴイ 00-1 号墓	Морин толгой, 1-р булш	トゥブ県 アルタンボラク郡	Төв аймаг, Алтанбулаг сум	方格規矩四神鏡	V
4	タリアト 16 号墓	Тариат, 16-р булш (Туулын хайрхан)			四虺龍紋鏡	IV
5	ドーリク・ナルス 1 号墳 西側第 1 衛星墓	Дуурлиг нарс, 1-р булш, баруун талын 1-р дагуул	ヘンティー県 バヤン-アダラガ郡	Хэнтий аймаг, Баян-Адарага сум	連弧文銘帯鏡	III
6	ドーリク・ナルス 1 号墳 西側第 3 衛星墓	Дуурлиг нарс, 1-р булш, баруун талын 3-р дагуул			連弧紋銘帯鏡	III
7	ド-リク・ナルス 1 号墳 南側第 2 衛星墓	Дуурлиг нарс, 1-р булш, өвөр талын 2-р дагуул			連弧文銘帯鏡	IV
8	ドーリク・ナルス 2 号墳	Дуурлиг нарс, 2-р булш			方格規矩鏡	IV
9	ドーリク・ナルス 3 号墳	Дуурлиг нарс, 3-р булш			七縁渦状螭龍文鏡	II
10	オラーンハナン 2 号墓	Баянхүрээ уулын Улаан ханан, 2-р булш	ヘンティー県 バヤンホタグ郡	Хэнтий аймаг, Баянхутаг сум	不明	-
11	ナリーニ・アム 36 号墓	Нарийны ам, 36-р булш	ヘンティー県 ジャルгалトハーン郡	Хэнтий аймаг, Жаргалтхаан сум	方格規矩鏡	IV
12	オゴモル・オール 2 号墓	Өгөөмөр уул 2-р булш	セレンゲ県サント郡	Сэлэнгэ аймаг, Сант сум	方格規矩四神鏡	IV
13-1	ホンゴル 7 号墓	Хонгор 7-р булш	セレンゲ県ダルハン市	Сэлэнгэ аймаг, Дархан хот	(平素縁)	-
13-2					方格規矩鏡	IV
14	イフ・ノーロゴト I 1 号墓	Их нөөлөгт-I, 1-р булш	セレンゲ県オルホン トール郡	Сэлэнгэ аймаг, Орхонтуул сум	未公表	-
15	オブゴント 83-2 号墓	Өвгөнт, 2-р булш	ボルガン県 ブレグハンガイ郡	Булган аймаг, Бүрэгхангай сум	内行花文鏡	V
16	エルスト・アル	Элст ал	ボルガン県 ダシンチレン郡	Булган аймаг, Дашинчилэн сум	連弧文銘帯鏡	V
17	エルスト・アル	Элст ал			(平素縁+櫛歯文)	-
18	ビシレルティーン・アム 9 号墓	Бишрэлтийн ам, 9-р булш			雲雷文帯鏡	V?
19	パローン・モフダグ 143 号墓	Баруун мухдаг, 143-р булш	ボルガン県モゴド郡	Булган аймаг, Могод сум	(流雲文外縁), 規矩鏡?	V
20	ボルハン・トルゴイ 1 号墓	Бурхан толгой, 1-р булш	ボルガン県 ホタグ-ウンドウル郡	Булган аймаг, Хутаг-Өндөр сум	四虺龍紋鏡	IV
21	ボルハン・トルゴイ 19 号墓	Бурхан толгой, 19-р булш			四虺龍紋鏡	IV
22	ボルハン・トルゴイ 33a 号墓	Бурхан толгой, 33a-р булш			連弧文銘帯鏡	IV
23	ボルハン・トルゴイ 36 号墓	Бурхан толгой, 36-р булш			方格規矩四神鏡	V
24	ボルハン・トルゴイ 39 号墓	Бурхан толгой, 39-р булш			(連弧文銘帯鏡?)	-
25	ボルハン・トルゴイ 71 号墓	Бурхан толгой, 71-р булш			連弧文銘帯鏡	III
26	ボルハン・トルゴイ 75 号墓	Бурхан толгой, 75-р булш			(平素縁)	-

size	文献 sources	銘文 inscription	備考 note
-	Törbat2011:p.320; Poloc'mak&Bogdanov2015	-	報告書に図版公表なし (Polos'mak et al. 2011: 70, 図 2.45 の「8. 鏡 (?)」に該当するか)
8	*Poloc'mak N. V. et al.2013:c.35	なし	
(18.5)	Rudenko1962:c.92,ra6.65-r; 梅原 1970: 図版 71-2; 岡崎 1973:No. II 1; 村上 1992:No.4, 図版 2-2; Danilov et al.1998: c.199,рис.12; Filippova2000:рис.2-4; 集成 2009:No.63; Minyaev &Elikhina2009:p.26,pic.5; Törbat2011:fig.1-9	なし	東側内外両槨の間で出土
15	韓国中央博ほか 2002:p.187 図 16, p.266 原色 6-2; Törbat2011: fig.3-23	なし	木棺蓋上で出土 / 鏡裏面に絹布が付着
8	Tsebeendorj1999:ra6.1-1; Eregzen2011:c.150,ra6.202; Törbat 2011,fig1-7	なし	
7.7	*大韓民国国立中央博物館ほか 2014: 図 57-571	下大明 (字間に "田" と渦文)	棺内で出土
(7)	Eregzen2011:c.145,ra6.190、*大韓民国国立中央博物館ほか 2014: 図 65-584,585	見日…明 (字間に "田" と渦文)	Eregzen2011 は「第 4 号衛星墓」と誤記 / 一片は木槨の上で出土
(9.1)	*大韓民国国立中央博物館ほか 2014: 図 96-705	而□	
(17.0)	韓国中央博 2009:p.74 上; 韓国中央博ほか 2011: 図 15-38, 写真 40-38; Eregzen2011:c.151,ra6.203; Yun&Chang2011:p.269, fig.11-18; Törbat2011:fig.3-20	なし	
(9.0)	韓国中央博 2009:p.74 下; 韓国中央博ほか 2011: 図 47-278, 写真 89-278; Yun&Chang2011:p.272,fig.15-1; Törbat2011:fig.1-8; Eregzen2011:c.151,ra6.204	なし	Eregzen2011:ra6.204 は写真が裏焼き / 墓は乱されていたらしいが、棺内より出土
-	*Eregzen et al.2019:t.385,3.5	-	
-	Törbat2011:fig.3-26	(十二支)	方格内に銘文帯あり
13.4	Eregzen2011:c.150,ra6.201	なし	鈕に通された状態の平布で作った紐が残存
-	-	-	
-	-	なし	
-	Iderkhangai et al.2019: т.303 記載	-	
(4)	Tsebeendorj1999:ra6.1-3; Eregzen2011:c.151,ra6.205; Törbat 2011:fig.2-16	なし	
-	展示	内清以昭 (字間に而を挟む)	2 片が同一個体の可能性もある
-	展示	-	2 片が同一個体の可能性もある
8.7	*Erdenebold2018:c.188,3yp7	-	
-	*Bat-Erdene2014:t.188,3.6-7	-	
-	Törbat et al.2003:t.173, 11; 韓国中央博 2007:p.130	なし	
-	Réunion des Musées Nationaux2000: PL.140; Törbat et al.2003: r.191, 1; 韓国中央博ほか 2004:p.56 図 23 下左; Törbat2011: fig.1-5	なし	
-	Réunion des Musées Nationaux2000:PL.144bis; Törbat et al.2003: r.203, 3, r.204, 8; 韓国中央博ほか 2004:p.56 図 23 下右; Törbat2011:fig.1-10	清明 (字間に而を挟む)	Törbat et al.2003 で同一資料が p.203 と 204 で二度掲載されている
長 4.9	Réunion des Musées Nationaux2000:PL.144; Törbat et al.2003: r.207; 韓国中央博ほか 2004:p.56 図 23 上; Törbat2011:fig.3-21	なし	
-	Törbat et al.2003:t.210, 2; Törbat2011:fig.1-11	-	
-	Törbat et al.2003:t.232, 4; Eregzen2011:c.148,ra6.195; Törbat2011:fig1-1	見日之…明 ("田" と渦巻文を挟む)	Eregzen2011:ra6.195 は裏焼き
-	Törbat2011: fig.1-2	-	



27	ボルハン・トルゴイ 93 号墓	Бурхан толгой, 93-р булш	ボルガン県 ホタグ-ウンドウル郡	Булган аймаг, Хутаг-Өндөр сум	獸帯鏡 (四乳四神鏡?)	後漢 後期
28	サルヒティン・アム 7 号墓	Салхитын ам,7-р булш	フブスグル県 ラシャント郡	Хөвсгөл аймаг, Рашаант сум	七縁渦状虺文鏡 (分離式,主文様c類)	II
29	ゴル・モド DS-25 号墳	Гол-мод, могила№25			方格規矩鏡	V
30	ゴル・モド 1 号墓	Гол мод- I 1-р булш	アルハンガイ県 ハイルハン郡	Архангай аймаг, Хайрхан сум	内行花文鏡	V
31	ゴル・モド 20 号墓	Гол мод- I 20-р булш			方格規矩四神鏡	IV
	ゴル・モド MF-21B 号墓	Гол мод- I 21B-р булш			未公表	-
32	ナイマー・トルゴイ 1 号墓	Наймаа толгой, 1-р булш	アルハンガイ県 エルデネマンдал郡	Архангай аймаг, Эрдэнэмандал сум	方格規矩鏡	IV
33	ナイマー・トルゴイ 20 号墓	Наймаа толгой, 20-р булш			連弧紋銘帯鏡	IV
34	ゴル・モド II 1 号墓 東側第 20 号衛星墓	Гол мод -II, 1-р булш, зуун талын 20-р дагуул			方格規矩鳥文鏡	VI
35	ゴル・モド II 1 号墓 第 30 号衛星墓	Гол мод -II, 1-р булш 30-р дагуул			獸帯鏡(四乳四神鏡)	後漢 後期
36	ゴル・モド II 5 号墳	Гол мод-II, 5-р булш			(連弧文)	-
37	ゴル・モド II 189 号墳 第 8 号衛星墓	Гол мод-II, 189-р булш, 8-р дагуул	アルハンガイ県ウン ドウル-オラーン郡	Архангай аймаг, Өндөр-Улаан сум	連弧文銘帯鏡	V
38	ゴル・モド II 189 号墓 第 11 号衛星墓	Гол мод-II, 189-р булш, 11-р дагуул			方格規矩鏡	V
39	ゴル・モド II 189 号墓 第 12 号衛星墓	Гол мод-II, 189-р булш, 12-р дагуул			方格規矩鏡	V
40	ホドギーン・トルゴイ 87-2 号墓	Худгийн толгой, 2-р булш	アルハンガイ県 バトツェンゲル郡	Архангай аймаг, Батцэнгэл сум	連弧文銘帯鏡	IV
41	タミリン・オラーン・ホ ショー 6 号墓	Тамирын улаан хошуу, 6-р булш			連弧文銘帯鏡	III
42	タミリン・オラーン・ホ ショー 100 号墓	Тамирын улаан хошуу, 100-р булш	アルハンガイ県 オギー・ノール郡	Архангай аймаг, Өгий нуур сум	方格規矩鳥文鏡	V
43	タミリン・オラーン・ホ ショー 109 号墓	Тамирын улаан хошуу, 109-р булш			方格規矩鏡	IV
44	タミリン・オラーン・ホ ショー 160 号墓	Тамирын улаан хошуу, 160-р булш			七縁渦状虺文鏡 (分離式,主文様c類)	II
45	タリン・ゴルワン・ヘレム I 城址,1A 土壇	Талын гурван хэрэм I,1A			連弧文銘帯鏡	IV
46	ホタグ・オール 59 号墓	Хутаг уул, 59-р булш	アルハンガイ県 ハシャート郡	Архангай аймаг, Хашаат сум	(流雲文外縁), 規矩鏡?	V
47	テブシ・オール 7 号墓	Тэбш уул, 7-р булш	ウブлハンガイ県 ボグド郡	Өвөрхангай аймаг, Богд сум	銘帯鏡	III
48	テブシ・オール 8 号墓	Тэбш уул, 8-р булш			?	-
49	ソヨオ・フレン・オール I 2 号墓	Соёо хүрэн уул I, 2-р булш	バヤンホンゴル郡オル ズイート郡	Баянхонгор аймаг, Өлзийт сум	連弧文銘帯鏡	IV
50	ソヨオ・フレン・オール I	Соёо хүрэн уул I			雲雷文帯鏡	IV
51	エンゲリン・ボーツ 103 号 墓	Энгэрын бууц, 103-р булш	スフバートル県 トゥブシンシレー郡	Сүхбаатар аймаг, Түвшинширээ сум	四虺龍紋鏡	IV
52	エンゲリン・ボーツ 3 号墓	Энгэрын бууц, 3-р булш			方格規矩鏡	VI

-	Törbat2011: fig.1-4	なし	
21.1	Ölziibayar et al. 2012-1: т.42; Ölziibayar et al. 2015: таб-3а; *Ölziibayar S. et al. 2009: т.193,з.32-1	なし	
不明	Умард хүннү, р.100 下; Dorjsuren1962:с.37,рис.7-7; 岡崎 1973: II 3; 村上 1992:No.5; Törbat2011:fig.3-18	なし	Хүний гол/Хуни-гол[露]/ 岡崎と集成は「ゴルモド 15 号墳」と誤記 / ダニロフはノヨン・オール 25 号墳と誤認
長 27.4	Desroches et al.2003:p.147; 韓国中央博 2007:p.201,pl.19 左; 安・奚 2009:p.79 図 7; Eregzen2011:c.151,таб.206; Törbat2011: fig.2-15	なし	布痕あり / 長 25.4cm/ 考古学報では復元径 27.4
17.3	韓国中央博 2007:p.201,PL.19 右; Erööl-Erdene & Gantulga2008: т.160,з.10; Eregzen2011:c.147,таб.193; Törbat2011:fig.3-17	[馬] 未申 / 辟不羊、 朱烏玄武順陰陽、 子孫備具居中央	
-	韓国中央博 2009:p.59	不明	出土を言及
8.1 × 6.9	Ferenczy1967:p.372,fig.1; Törbat2011:fig.3-22; Erdélyi2000: p.148,PL.31	[子] 丑寅卯辰未 馬羊申酉	卯 - 酉方向に鈕孔
(3.8)	Tsebeendorj & Erdélyi1990:c.124,таб.3-10; Tsebeendorj1999: таб.2-4; Törbat2011:fig.1-13	清以 (字間に而を 挟む)	大きさは 1cm=9mm 縮尺より計算、ツェベ ンドルジ誤 tab2-3 → 正 tab2-4
-	Miller et al.2004:p.16,fig.9-2; Törbat2011:fig.3-19	なし	頭部付近出土 (Mongolian journal p.7 fig.3 の墓 葬平面図から)
-	Erdenebaatar et al.2011:p.312,fig.11-3; Eregzen2011:c.148,таб.197	なし	青龍、白虎
厚 2.5	*Erdenebaatar et al.2015:т.67, № 13, т69, № 4	なし	
長 5.8	* 河南省文物考古研究院ほか 2018: 封裏, № 3	内清…□ (字間に 而を挟む)	
長 11.8	* 河南省文物考古研究院ほか 2018: 封裏, № 2	なし	
長 7.8	* 河南省文物考古研究院ほか 2018: 封裏, № 1	なし	玄武
9.9	Tsebeendorj&Erdélyi1990:c.125,таб.4-1; Tsebeendorj1999: таб.2-1; 韓国中央博ほか 2004:p.52; Eregzen2011:c.148,таб.194; Törbat2011:fig.1-12	内 [清] 以 昭明光 日月 (字間に而を 挟む)	
6.3	韓国中央博 2009:p.107; Törbat2011:fig.1-3	見日 [光] [長] [不] □□ (字間に而を 挟む)	
11.3	Lai2006:p.37,fig.2; Khatanbaatar2007:т.165,з.4; Eregzen2011: c.149,таб.198; Törbat2011:fig.3-24	なし	
長 15	Lai2006:p.37,fig.3, fig.4, p.64; Khatanbaatar2007:т.167,з.6; Eregzen2011:c.149,таб.200; Törbat2011:fig.3-25	不知老、渴飲玉泉 飢食棗、浮游	Хүннүгийн ов は写真が裏焼きか
-	Lai2006:p.38,fig.5; Khatanbaatar2007:т.168,з.7	なし	
(16)	*Ochir et al.2019: т.172	以 [昭] 夫 (字間に而を挟む)	
不明	*Samashev2016: с.189,рис7	-	
(約 3)	Tsebeendorj1985:p.56,pic.4, 18; 村上 1992:No.6-a; Tsebeendorj 1999:таб.2-3; Törbat2011:fig.1-14	有憲 [月]	村上のテプシ・ウラ古墳群 / ツェベ ンドルジ誤 tab2-4 → 正 tab2-3/Горы Тэбш Могильник
(約 3)	Tsebeendorj1985:p.56,pic4,17; 村上 1992:No.6-b; Tsebeendorj 1999 :таб.1-2; Törbat2011:fig.1-6	なし	村上のテプシ・ウラ古墳群
記載 なし	*Batsaikhan et al.2019: с.168,з.7	[而] 明而以	
不明	* 国際古跡遺址理事会西安国際保護中心 ( <a href="http://www.silkroads.org.cn/portal.php?mod=view&amp;aid=21547">http://www.silkroads.org.cn/portal.php?mod=view&amp;aid=21547</a> )	なし	Batsaikhan et al.2019 では言及がなく、資料が 出土した墓番号は不明。
(10)	韓国中央博 2009: p.193	なし	棺北短壁下から出土
(11.3)	Amartüvshin et al.2019: т.59 表 記 載 ; Erdenebat et al.2019: т.204 記 載 ; *Institute of archaeology MAS 2020:т.80,з.22	-	調査時暫定番号 : Ex.19.07

53	イフ・フングイン・アム 3 号墓	Их хүнгүйн ам, 3-р булш	スフバートル県	Сүхбаатар аймаг,	(平素縁 + 櫛歯文圈)	-
54	イフ・フングイン・アム 4 号墓	Их хүнгүйн ам, 4-р булш	トゥブシンシレー郡	Түвшинширээ сум	連弧文銘帯鏡	Ⅲ
55	チャンドマニ・ハル・オール 217 号墓	Чандмань хар уул, 217-р булш	ドルノゴビ県デルゲレフ郡	Дорноговь аймаг, Дэлгэрэх сум	方格規矩鏡	Ⅴ
56	シャーハル・トルゴイ 1 号墓	Шаахар толгой, 1-р булш	アルタイ県チャンドマニ郡	Говь-Алтай аймаг, Чандмань сум	(平素縁 + 櫛歯文圈)	-
57-1	シヨンボーズイン・ベルチル 19 号墓	Шомбуузын бэлчир, 19-р булш	ホブド県 モンハイルハン郡	Ховд аймаг, Мөнхайрхан сум	四虺龍紋鏡	Ⅳ
57-2					四虺龍紋鏡	Ⅳ
57-3					(外帯: 双線三角文 + 鋸歯文)	-
57-4					方格規矩鏡	-
58	ナインテ・スム	Наинтэ-сумэ	モンゴル		連弧紋銘帯鏡	Ⅳ
59	モンゴル出土	-	モンゴル	-	方格規矩鏡	Ⅴ
60	モンゴル出土	-	モンゴル	-	方格規矩鏡	Ⅴ

異形の鏡

1	アイラギーン・ゴズゴル遺跡	Айрагийн гозгор	オルホン県ジャルガラント郡	Орхон аймаг, Жаргалант сум	三角形の突起 / 環状の突出部分 1	-
2	ゴル・モド II 1 号墳東側第 22 号衛星墓	Гол мод -II, 1-р булш, зуун талын 22-р дагуул	アルハンガイ県ウンドゥル - オラーン郡	Архангай аймаг, Өндөр-Улаан сум	環状の突出部分 2	-
3	デルゲルハーン・オール 5 号墳	Дэлгэрхаан уул, 5-р булш	スフバートル県トゥブシンシレー郡	Сүхбаатар аймаг, Түвшинширээ сум	三角形の突起 / 孔 1	-

B: ザバイカル

1	イヴォルガ土城址第 41 号住居址	Иволгинское городище, жилище 41	ロシア連邦ブリヤート共和国イヴォルガ地区	Республика Бурятия, Иволгинский район	草葉紋鏡	Ⅱ
2	イヴォルガ土城址第 49 号住居址	Иволгинское городище, жилище 49			細地文鏡 (連弧文 + 渦巻細地文)	前漢初
3	イヴォルガ土城址第 10 号土坑	Иволгинское городище, яма 10			(連弧縁)	Ⅱ ?
4	イヴォルガ土城址第 57 号土坑	Иволгинское городище, яма 57			細地文鏡 (宝珠形 + 鳥 + 葉)	戦国鏡
5	イヴォルガ土城址第 87 号土坑	Иволгинское городище, яма 87			(平素縁)	-
6	イヴォルガ城址 Φ 35 区出土	Иволгинское городище, кв.Ф35			(連弧文圈帯 + 乳 ?)	Ⅱ ?
7	イヴォルガ土城址採集	Иволгинское городище			(平素縁)	-
8	バヤン - ウンデル城址	Городище Баян-Ундэр	ロシア連邦ブリヤート共和国ジダ地区	Республика Бурятия, Джидинский район	連弧文銘帯鏡	Ⅲ
9	ヨンホル 1 号墓	Енхор могильник, могила №1			方格規矩鏡	Ⅴ
10	ヨンホル 19 号墓	Енхор могильник, могила №19			銘帯鏡	Ⅳ
11	ヨンホル 51 号墓地	Енхор могильник, могила №51			円圈鳥文鏡 (四乳八禽鏡)	Ⅳ
12	オルゴイトン 5 号墳	Оргойтон, курган №5			(銘文 + 鋸歯)	Ⅴ ?
13	オルゴイトン 17 号墓	Оргойтон, курган №17			銘帯鏡	Ⅳ
14	オルゴイトン 18 号墓	Оргойтон, курган №18			(流雲文外縁), 規矩鏡 ?	Ⅳ - Ⅴ
15	ツアラム 7 号墳 (木造室出土)	Царам, курган №7			ロシア連邦ブリヤート共和国キャフタ地区	Республика Бурятия, Кяхтинский район

長 4	Amartüvshin et al.2019: т.59 表 記載 ; *Institute of archaeology MAS 2020:т.74,з.2	なし	調査時暫定番号 : Ex.19.01
8.6	Amartüvshin et al.2019: т.59 表 記載 ; *Institute of archaeology MAS 2020:т.76,з.8	-	調査時暫定番号 : Ex.19.02
(11.4)	Günchinsüren & Erööl-Erdene2015: т.193,з.156-3	見日之光、天下大明	
(9.86)	Batbold2017: p.26		
-	Eregzen2011:c.148,таб.196	なし	
	Miller2011:p.472, fig.10-4	なし	
-	Miller2011:p.472, fig.10-5	なし	
-	Miller2011:p.472, fig.10-6	なし	
-	Borovka1927:таб IV -1; 岡崎 1973: II 2; 『東洋文化史大系 2』 p.278	1 字あり	チュルク期の墓葬から出土 (連珠文錦、鏡)
不明	Tsebeendorj1999:таб.2-2	なし	
15	Eregzen2011:c.149,таб.199	なし	

不明	* モンゴル国立博物館展示	-	概報で鏡が出土したと言及されているのは 86 号墓 (Odbaatar & Egiimaa2017: т.260 記述)
不明	*Miller et al.2006:p16fig9-1; *Eregzen[ed]2011: No.191	-	被葬者右足付近 (棺隅) から布に包まれた状態で出土。
16	*Eregzen[ed]2011: No.192	-	

(14.4)	Davydova1985:рис.10-20; Davydova1995:таб.81-10; 村上 1992: No.1-c, 図 2-3; 集成 2009:No.56	なし	
(16)	Davydova1985:рис.10-9; 村上 1992:No.1-b, 図 2-2; Davydova 1995:таб.103-7; 集成 2009:No.55	なし	
(12)	Davydova1985:рис10-25; 村上 1992:No.1-d, 図 2-4; Davydova 1995:таб.123-1; 集成 2009:No.57	なし	
(12)	Davydova1985:рис10-19; 村上 1992:No.1-a, 図 2-1; Davydova 1995:таб.130-2; 集成 2009:No.54	なし	
(8)	Davydova1995:таб.134-2	なし	鏡力
-	Davydova1995:таб.14-14	なし	鏡力
(6.7)	Davydova1995:таб.4-14	なし	鏡力
不明	Danilov et al.1998:c.116,рис.2; Filippova2000:рис.1-3; Museum of BSC SB RAS2002:c.11	見 [日] 之 光、天下大明 (字間に "田" と渦文)	住居の北東隅で出土 (Филиппова)/ 紐頂がくぼんでいる /кочевые культуры центральной азии では Инв.88
不明	Danilov et al.1998:c.116,рис.6; Filippova2000:рис.1-5; Museum of BSC SB RAS2002:c.11	不知老、渴飲玉泉	кочевые культуры центральной азии では Инв.143/ ダニロフはヨンホルと記載するのみ
不明	Danilov et al.1998:c.199,рис.8	内…□月 (字間に面を挟む)	
不明	Danilov et al.1998:c.199,рис.9; Filippova2000:рис.2-1	なし	ダニロフは 85 号墓と記載
不明	Nikolaev2010:c.192	□渴飲	報告では漢字 3 字のある破片とあまり重要でない中央裝飾帯部分
-	* 調査者提供 (N. N. Nikolaev)	[明?] □	
-	* 調査者提供 (N. N. Nikolaev)	-	
13	Minyaev & Sakharovskaya2007a:c.162рис3-7; Minyaev & Sakharovskaya2007b:p.45; Minyaev & Sakharovskaya2010:таб.4	なし	



16-1	ツアラム7号墳(人形1 共伴)	Царам, курган №7	ロシア連邦ブリヤート共和国キャフタ地区	Республика Бурятия, Кяхтинский район	連弧文銘帯鏡	IV
16-2	ツアラム7号墳(人形2 共伴)				不明	-
16-3	ツアラム7号墳(人形3 共伴)				連弧文銘帯鏡	IV ?
17-1	イリモヴァヤ・パジ3号墓	Ильмовая падь, погребение №3	ロシア連邦ブリヤート共和国キャフタ地区	Республика Бурятия, Кяхтинский район	四咫龍紋鏡	IV
17-2					連弧文銘帯鏡	IV
18	イリモヴァヤ・パジ38号墓	Ильмовая падь, могила №38	ロシア連邦ブリヤート共和国キャフタ地区	Республика Бурятия, Кяхтинский район	獸帯鏡 (四乳四神鏡)	前漢後期
19	イリモヴァヤ・パジ51号墓	Ильмовая падь, могила №51			銘帯鏡	IV
20	チェリヨムホヴァヤ・パジ2号墓	Черёмуховая Падь, могила №2			方格規矩鏡	V
21	チェリヨムホヴァヤ・パジ15号墓	Черёмуховая Падь, могила №15			方格規矩鏡	IV
22	チェリヨムホヴァヤ・パジ38号墓	Черёмуховая Падь, могила №38			(外帯: 双線三角文+鋸齒文)	-
23	ブルドゥヌイ2号墓	Бурдуны, могила №2			方格規矩鏡	V - VI
24	ドゥリヨヌイ №.248	Дурены, инв.№248			(平素縁)	-
25	ドゥリヨヌイ №.2541	Дурены, инв.№2541			規矩鏡?	-
26	ゾルゴル文化	(Зоргольская культура)	ロシア連邦ザバイカル管区	Забайкальский край	方格規矩鳥紋鏡	VI

かとなったため訂正する。

- 2)2020年7月18日付で匈奴の龍城を発見したと報道された遺跡はこの城址である。城址は中国側の報告では「和日門塔拉」、モンゴル側の報告では「タリン・ゴルワン・ヘレム」と異なる名称を採っているが、同一遺跡である。
- 3)モンゴル・カザフ共同調査の報告中では「セル-オドジャブがかつて調査した」とのみ記載があるが、これは班長をセル-オドジャブが務めた蒙・ソ歴史文化調査団青銅器鉄器時代研究班(Монгол-Зөвлөлтийн түүх соёлын хамтарсан экспедицийн түрэл төмрийн түрүү үеий судлах анги)の1970年調査で対象になった遺跡ではないかと推測される。
- 4)報告では人形1の出土状況図のキャプションが落ちているため遺物番号が不明であるが、調査者提供の出土状況写真からみて鏡は遺物番号3に該当すると思われる。
- 5)匈奴-サルマート期において、柄鏡の出土が確認されている東端は新疆地域である。例えば新疆吐魯番市の勝金店13号墓では、破鏡片を柄鏡形の木製品に嵌め込んで使用しており、同地では柄鏡のイメージが定着していた

ことを感じさせる(参考図)。

- (6)集計にあたり、前漢初はI期、前漢後期はIII期、後漢はV期、後漢後期はVI期とし、二時期にかかるものはその両時期に0.5とした。

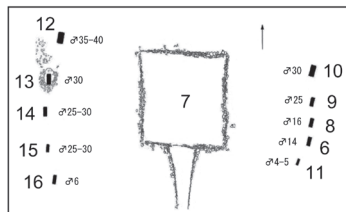


勝金村13号墓(M13:2)

- (7)例えばツアラム7号墳の場合を例にすると、紀年漆器は前5年以前に製作された資料であり、出土鏡も漢鏡IV期である。したがって、この墓の埋葬年代はこの年代よりも後ということになるが、従来公表されていた放射性炭素年代測定値(図7測定値の左から1,2番目、参考1の上から1,2番目の測定値)は非常に古い年代を示しており疑問があった。2017~19年にS. S. ミニャーエフ・大谷で再測定を実施した結果、やはり年代が下った(3~5番目測定値)。この場合のエラーの原因は、旧測定時のサンプルが木材であったことによる古木効果と考えられる。
- (8)図中の遺跡表示は、例えば「Tsaram, #7-Sat\_10」の場合、「ツアラム7号墳第10号衛星墓」を意味する(Sat:

不明	* 調査者提供 (S. S. Miniaev); *Miniaev & Sakharovskaia2007: p.50, fig.9	見 日 [ 之 ] 光 ]、 □ 下大 ( 字間に " 田 " と渦文 )	西側空間中央 ①人形 1- 白樺容器から銅鏡片 西側空間
不明	-	不明	②人形 2- 漆器容器 ( 考工造 ) 内で銅鏡片
不明	* 調査者提供 (S. S. Miniaev); *Miniaev & Sakharovskaia2007: p.52, fig.14	銘文あり	東側空間 ③人形 3- 小さな白樺容器と完鏡
10	Talyko-Gryntsevuch 1899(1999): c.50, таб.12-3c; Rudenko1962: c.92, таб.65-a; 岡崎 1973:No. II 4-1; Danilov et al.1998: c.199, рис.10; Filippova2000: рис.2-1; *Dluzhnevskaya2011:таб.	なし	鏡径は 2/3 図面から復元 /Rudenko1962 はスージンスク墓地出土と記載
(6.9)	Talyko-Gryntsevuch 1899(1999):c.50, таб.12-36; Rudenko1962: c.92,таб.66-b; 岡崎 1973: II 4-2; Danilov et al.1998:c.116, рис.1; Filippova2000:рис.1-1; *Dluzhnevskaya2011:таб.	見日之 ( 字間に " 田 " と渦文 )	鏡径は 2/3 図面より復元 (Talyko-Gryntsevuch:p21 は長 5.7 と記載)/Культура хуннов はスージンスク墓地出土と記載
10.9	Rudenko1962:c.92,таб.65-b; Sosnovskii1946:c.62,рис.12; 岡崎 1973: No.5; Moshkova1992:таб.108-8; Danilov et al.1998;c.199,рис.11; Filippova2000:pic2-3; 集成 2009:No.1837	なし	岡崎は楡の谷古墳と表記 /38 号墓出土遺物であることは Kononov1976 c 203 で最初に言及 / 鏡径は 2/3 図面より復元
8	Kononov1976:c.55,рис.28, таб22-1; 村上 1992:p.108, 図 2-5; Danilov et al.1998:c.116, рис.7; Filippova2000:рис.1-6; 集成 2009:No.59	明 ( 而を挟む )	出土墓葬図 p53/ 村上是イリム谷古墳群
12.2	Kononov1976:таб.22-3; 村上 1992:No.3-c, 図 2-8; Danilov et al.1998:c.116,рис.3; Filippova2000:рис.1-2; 集成 2009:No.62	なし	外縁が S 字龍紋、内区文様は 4 獣か
10.8	Kononov1976:c.93,рис.61, таб.22-4; 村上 1992:No.3-a, 図 2-6; Moshkova1992:таб.108-6; Filippova2000:рис.1-4; 集成 2009:No.60	なし	棺と槨の間、短辺側で出土 (Хунну в Забайкалье p 92 出状図)
10.3	Kononov1976:таб.22-2; 村上 1992:No.3-b, 図 2-7; 集成 2009: No.61	なし	
10	Talyko-Gryntsevuch 1902(1999): c.111, таб.2-n	なし	
-	Davydova & Minyaev2003:таб14-21	なし	
-	Davydova & Minyaev2003:таб14-1	なし	
(11.3)	Kovychev2006:c.252, рис.5-32	4 文字あり	1cm=6mm で半径 3.4 を計算

satellite burial)。ツアラム遺跡は主墳と衛星墓が連番であり、実際には 7 号墳以外はその衛星墓である ( 参考図 )。そのため、誤りを避けるために 7 号墳の文字を加えている。また、ゴル・モド I 墓地の 43~45 号墓は衛星墓として報告されているが、その主墳の墓番号が報告されていないため、「( 不明墳 )X\_Sat.」としている。



参考文献 :

< 日中韓 ( 出版年 順 ) >  
 ツアラム墓地の墓番号  
 岡村秀典 1984 「前漢鏡の編年と様式」『史林』67-5: 1-42.  
 岡村秀典 1993 「後漢鏡の編年」『国立歴史民俗博物館研究紀要』55: 39-83.  
 廣川守 2009 「前漢鏡の地文施文について—山東臨淄出土螭龍文鏡範・渦状虺文鏡範を中心に—」『鏡範—漢式鏡の製作技術—』八木書店 : 255-270.

大谷育恵 2014 「疆外出土中国鏡集成 (1) —モンゴル国ならびにザバイカル地域」『金沢大学考古学紀要』35, 金沢大学考古学研究室 : 45-72.  
 大韓民国国立中央博物館・モンゴル国立博物館・モンゴル科学アカデミー考古学研究所 : 대한민국의 국립중앙박물관・몽골국립박물관・몽골과학아카데미 고고학연구소 2014 『몽골 도리릭 나르스 흥노무덤 II』 ( 한몽 공동학술조사보고 제 6 책 ) [ 『韓蒙共同学術調査報告 第 6 冊 モンゴル ドーリック・ナルス匈奴墓 II』 ]  
 内蒙古自治区文物考古研究所・蒙古国游牧文化研究國際学院 2015 「2014 年蒙古国後杭愛省烏貴諾蘇木和日門塔拉城址 IA-M1 発掘簡報」『草原文物』2015-2: 32-39.  
 Batbold N., 2017 「고비알타이 아이막 찬드만 솜 샤하르톨고이 유적지의 고고학적 발굴 조사」『몽골의 옛사람 뼈 I』 ( 한국·몽골 국제공동연구 분석보고서 ), 대한민국 문화재청 국립문화재연구소·몽골 과학아카데미 역사고고학연구소 :18-25. [ 『ゴビアル

- アイマク ソム  
タイ県チャンドマニ郡シャーハル・トルゴイ遺跡の考古学的発掘調査『モンゴルの古人骨 I』(韓蒙国際共同研究分析報告書)
- ウラーン  
河南省文物考古研究院・洛陽市文物考古研究院・烏蘭バートル  
巴托大学考古学系 2018 「蒙古国後杭愛省高勒毛都 2 号墓地 M189 陪葬墓発掘簡報」『華夏考古』2018-2: 34-44.
- 大谷育恵 2019 「草原の東から西に伝わった中国製の文物」『ユーラシアの大草原を掘る』(アジア遊学 238) 勉誠出版 :255-265.
- 大谷育恵 2021 「モンゴル国で新たに確認された頭部結束具と頸部飾を伴う埋葬事例について」『金大考古』79 号 金沢大学人文学類考古学研究室 .
- 大谷育恵・ミニャーエフ S. S.・ニコラエフ N. N. 2021 「匈奴遺跡で実施された放射性炭素年代測定値の整理(ロシア連邦ブリヤート共和国所在の遺跡)」『金大考古』80 金沢大学人文学類考古学研究室 .
- 大谷育恵 [編] 2021 「匈奴遺跡で実施された放射性炭素年代測定値の整理(モンゴル国所在の遺跡)」『金大考古』80 金沢大学人文学類考古学研究室 .
- <英語・ロシア語・モンゴル語>
- Amartlövshin Ch., Honeychurch W. et al.: Амартүвшин Ч., Ханичёрч У., Батсайхан З., Эрдэнэбат У., Шэлах Г., Вraith Ж., Галдан Г., Батдалай Б., Ишицэрэн Л., Мандах Д., Плэүгэр С., Вилсон В., 2019, «Дорнод Монгол: Археологийн хайгуул, малтлага судалгаа» төслийн 2019 оны хээрийн судалгааны үр дүн, *Монголын археологи-2019*, УБ: 56-62. [「“東部モンゴル: 考古探査、発掘” 班の 2019 年度田野調査の概要」『モンゴル考古学 2019』]
- Vanchigdash Ch.: Ванчигдаш Ч., 2012, ШУТИС-ийн нийгмийн технологийн сургуулийн дэргэдэх археологи-этнографийн экспедицийн 2012 оны археологийн судалгаа, *Соёлын өвийн мэдээ, мэдээлэл, 2012-1 (№6)*, Соёлын өвийн төв: 43. [「科学技术大学社会技術学部の考古・歴史調査隊の 2012 年考古調査」『文化遺産ニュース、通説』2012-1(№.6), 文化遺産センター]
- Bat-Erdene S.: Бат-Эрдэнэ С., 2014, Мухдагийнмны хүннү булш, *Материалы V международной научной конференции «Древние культуры Монголии и Байкальской Сибири»*, ч. 1, Кызыл, сс.182-189. [「モフダギーン・アムの匈奴墓」『第 5 回国際学術会議“モンゴルとバイカルシベリアの古代文化”』1 冊]
- Batbold N.: Батболд Н., 2017, Говь-Алтай аймгийн Чандмань сутын Шаахар толгойн дурсгалт газар хиймэн археологийн малтлага судалгаа, 『몽골의 옛사람 뼈 I』( 한국・몽골 국제공동연구 분석보고서), 대한민국 문화재청 국립문화재연구소・몽골 과학아카데미 역사고고학연구소: 17-25.[「ゴビ-アルタイ県チャンドマン郡のシャーハル・トルゴイ遺跡の考古学調査」『モンゴルの古人骨』I, 大韓民国文化財庁国立文化財研究所・モンゴル科学アカデミー歴史・考古学研究所]
- Batsaikhan Z., Erdenebat U., Amarbilig Ch., Sodnovjavts D., Tergüünbayar S., Zoljargal A., 潘玲, 王立新, 魏東, 王達来: Батсайхан З., Эрдэнэбат У., Амарбишиг Ч., Содномжамц Д., Тэргүүнбаяр С., Золжаргал А., Пан Лин, Ван ЛиСин, Вэй Дун, Ван Далай, 2019, Монгол-Хятадын хамтарсан “Түйн гол” археологийн хээрийн шинжилгээний ангийн 2019 оны хайгуул, малтлага судалгааны ажлын товч үр дүн, *Монголын археологи-2019*, УБ:165-169. [「蒙中共同“トゥイン・ゴル”考古田野調査隊の 2019 年の勘探、発掘調査概報」『モンゴル考古学 2019』]
- Brosseder U. et al., 2011, Twelve AMS-radiocarbon dates from Xiongnu period sites in Mongolia and the problem of chronology, *Археологийн судлал*, т.31, УБ: 53-70. [『考古学研究』31]
- Dluzhnevskaya G. V.: Длужневская Г. В., 2011, *Археологические исследования в Центральной Азии и Сибири в 1859-1959 годах (по документам Научного архива Института истории материальной культуры РАН)*, СПб. [『1859～1959 年の中央アジアとシベリアの考古学研究(ロシア科学アカデミー歴史物質文化研究所の学術アルヒーフ資料に基づく)』]
- Erdenebaatar D., Iderkhangai D., Mizhiddorzh Ye. Orgilbayar S.: Эрдэнэбаатар Д., Идэрхангай Т., Мижиддорж Э., Оргилбаяр С., Батболд Н., Галбадрах Б., Маратхаан А., 2015, *Балгасын тал дахь Гол мод-2-ын хүннүгийн язгууртны булшны судалгаа*, УБ. [『バルガスイン平原に所在するゴル・モドII 匈奴貴族墓の研究』]

- Erdenebat U., Batsaikhan Z., Batdalai B.: Эрдэнэбат У., Батсайхан З., Батдалай Б., 2019, МУИС-ийн ШУС-ийн антропологи, археологийн тэнхимийн оюутны 2019 оны археологийн хээрийн дадлагын товч тайлан, *Монголын археологи-2019*, УБ : 238-241. [「モンゴル国立大学理学部の人類学と科技考古学生の2019年考古田野実習簡報」『モンゴル考古学2019』]
- Erdenebold L., Banchigdash Ch., Odbayar Z.: Эрдэнэболд Л., Ванчигдаш Ч., Одбаяр З., 2018, Бишрэлтийн амны хүннүгийн жирийн ирээдйн оршуулгын бүлэг дурсгалд 2018 онд хийсэн археологийн малтлага судалгааны урьдчилсан үр дүнгээс, *Монголын археологи-2018*, УБ: 184-188. [「ビシレルティーン・アム匈奴一般民衆墓群で2018年に行った考古発掘調査の成果より」『モンゴル考古学-2018』]
- Eregzen G.[ed]: Эрэгзэн Г. [ред], 2011, *Хүннүгийн өв*, УБ. [Treasures of the xiongnu]
- Eregzen G., Enkhbold S., Aldarmönkh P.: Эрэгзэн Г., Энхболд С., Алдармөнх П., 2019, Хэнтий аймгийн Баянхутаг сумын нутаг, Баянхүрээ уулын улаан ханан хэмээх хүннүгийн дурсгалт газар ажилласан хээрийн судалгааны ажилын үр дүнгээс, *Монголын археологи-2019*, УБ: 383-386. [「ヘンティーン県バヤンホタグ郡に所在するバヤンフレイ・オールのアラアン・ハナンという匈奴遺跡で実施した野外調査報告の成果より」『モンゴル考古学2019』]
- Günchinsüren B., Erööl-Erdene Ch.: Гүнчинсүрэн Б., Ерөөл-Эрдэнэ Ч., 2015, *Чандмань хар уулын археологийн дурсгал I*, УБ. [『チャンドマニ・ハル・オールの考古学調査』]
- Iderkhangai T., Tishkin A. A., Seregin N. N., Orgilbbayar S., Tsend D., Batchimeg B., Amgalanbat B., Davaakhüü Ye., Erdeneperüev P.: Идэрхангай Т., Тишкин Н. Н., Серегин Н. Н., Оргилбаяр С., Цэнд Д., Батчимэг Б., Амгаланбат Б., Даваахүү Э., Эрдэнэпүрэв П., 2019, Сэлэнгэ аймгийн Орхонтуул сум нутаг дахь Их Нөөлөгт хэмээх газарт явуулсан хүннү булшны малтлага судалгааны ажлын товч үр дүн, *Монголын археологи-2019*, УБ : 301-307. [「セレンゲ県オルホントール郡に所在するイフ・ノーロゴトで行った匈奴墓発掘調査の成果概要」『モンゴル考古学2019』]
- Institute of archaeology, Mongolian academy of Sciences: Монгол улс шинжлэх ухааны академи археологийн хүрээлэн, 2020, *Монгол-Америкийн хамтарсан “Дорнод монгол: Археологийн хайгуул, малтлага судалгаа” төслийн хээрийн шинжилгээний ангийн 2019 оны тайлан*, УБ. [『蒙米共同 “東部モンゴル: 考古学探査、発掘調査” プロジェクト田野調査隊 2019年報告』]
- Miller Brayan K., Allard Francis, Erdenebaatar D., Lee Christine, 2006, A xiongnu tomb complex: Excavations at Gol Mod 2 cemetery, Mongolia (2002-05), *Mongolian journal of anthropology, archaeology and ethnology*, vol.2 (271), Department Archaeology and anthropology, National university of Mongolia: 1-21.
- Miniaev Sergei S., Julia Elikhina, 2009, On the Chronology of the Noyon uul barrows, *The Silk Road vol.7*, Saratoga (U.S.A): The Silkroad Foundation: 21-35.
- Miniaev S. S., Sakharovskaia L.M., 2007, Investigation of a xiongnu royal complex in the Tsaraam valley, Part 2: The Inventory of Barrow No.7 and the chronology of the site, *The Silk Road 5-1*, Saratoga, U.S.A: The Silkroad Foundation: 44-55.
- Nikolaev N. N., Miniaev S. S.: Николаев Н. Н., Миняев С. С., 2017, Работы Центрально-Азиатской археологической экспедиции на могильнике Оргойтон, *Археологический сборник, вып. 41*: Изд. ГЭ, СПб: 143-158. [「オルゴイトン墓地における中央-アジア考古学調査団の調査」『考古学論集』41号]
- Ochir A., Mandakhbayar G., 陳永志, 薩仁畢力格, 陳鵬飛: Очир А., Мандахбаяр Г., Чен ЁнЖи, Саранбилэг, Чэн ПенФей, 2019, Монгол-Хятадын хамтарсан «Монгол улсын нутаг дахь эртний нүүдэлчдийн археологийн хайгуул, судалгаа» төслийн 2019 оны ажлын товч үр дүн, *Монголын археологи-2019*, УБ: 170-175. [「蒙中共同 “モンゴル国に所在する古代遊牧考古探査と調査” プロジェクトの2019年活動成果」『モンゴル考古学2019』]
- Odbaatar Ts., Egiimaа Ts.: Одбаатар Ц., Эгиймаа Ц., 2017, 2016 онд Айрагийн гозгорт явуулсан археологийн судалгааны танилцуулга, *Монголын археологи-2016*, УБ: 260-261. [「2016年にアイラギーン・ゴズゴルで行った考古調査報告」『モンゴル考古学2016』]
- Otani Ikue, 2020, Chinese artifacts as a time scale: In the



case of Xiongnu, (シンポジウム開催延期により論集刊行も延期中).

Ölziibayar S.: Өлзийбаяр С., 2012, Хүннүгийн түүх, соёлын дурсгалын мөрөөр (Хээрийн шинжилгээний ангийн ажилын товч танилцуулга), *Соёлын өвийн мэдээ, мэдээлэл, 2012-1 (№6)*, Соёлын өвийн төв: 42. [「匈奴の歴史、文化遺跡(田野調査活動紹介)」『文化遺産ニュース、通説』2012-1(№.6)]

Ölziibayar S., Ochir B., Urtnasan Ye.: Өлзийбаяр С., Очир Б., Уртнасан Э., 2015, К вопросу раннего этапа хуннуской археологической культуры (на материале могильника Салхитын ам), *Актуальные вопросы археологии и этнологии Центральной Азии (Материалы международной научной конференции Улан-Удэ, 7-8 апреля 2015 г.)*, Иркутск: 323-332. [「匈奴の考古学文化の早期段階の問題について(サルヒティン・アム墓地の資料に基づいて)」『中央アジアの考古学と民族学の焦眉の問題』(国際学術会議資料集, ウランウデ, 2015年4月7~8日)]

Ölziibayar S., Ochir B., Urtnasan Ye.: Өлзийбаяр С., Очир Б., Уртнасан Э., 2019, *Хүннүгийн түүх соёлын судалгаа (Салхитын амны дурсгалт газар)*, УБ. [『匈奴歴史文化の研究(サルヒティン・アム遺跡)』]

Poloc'mak N. V., Chistyakova A. N., Bogdanov E. S., Shatskaya S. S.: Полосьмак Н. В., Чистякова А. Н., Богданов Е. С., Шацкая С. С., 2013, Китайское зеркало из 22-го Ноин-улинского кургана, *Проблемы археологии, этнографии, антропологии Сибири и сопредельных территорий, т.19*, Ноб: изд-во Инс. ЛиЭ СО РАН, сс. 315-317. [ポロシマク N. V.・チステイヤコヴァ A. N.・ボグダノフ E. S.・シャツカヤ S. S. 「ノイン・ウラ 22 号墓出土の中国鏡」『シベリアと隣接地域の考古学・民族学・人類学の諸問題』19 巻]

Poloc'mak N. V., Bogdanov E. S.: Полосьмак Н. В., Богданов Е. С., 2015, *Курганы суцзуктэ (Ноин-ула, Монголия)*, Ноб: инфолио. [『スズクテのクルガン群(ノイン・ウラ, モンゴリア)』]

Purcell David E., Spurr Kimberly C., 2006, *Archaeological Investigations of Xiongnu Sites in the Tamir River Valley (Results of the 2005 Joint American-Mongolian Expedition to Tamiryn Ulaan Khoshuu, Ogi nuur,*

Arkhangai aimag, Mongolia), *The Silk Road, vol. 4-1*, Saratoga (U.S.A): The Silkroad Foundation: 20-32.

Samashev Z., Bayar D., Ongaruli A., Khasenova B., Enkhtor A., Kiyasbek G., Munkhtulga R., Bayarkhuu N.: Самашев З., Баяр Д., Онгарулы А., Хасенова Б., Энхтор А., Киясбек Г., Мунхтулга Р., Баярхуу Н., 2016, Хунну на Орхоне (по материалам могильника Хутаг уул), *Саки и савроматы Казахских степей: Контакт культур (Сборник научных статей, посвященный памяти археолога Бекена Нурмуханбетова)*, Алматы: 183-217. [「オルホンの匈奴(ホタグ・オール墓地の資料に基づいた)」『カザフ草原のサカとサウロマタイ: 文化接触』]

略称:

ГЭ – Государственный Эрмитаж (エルミターージュ美術館)  
Инс. ЛиЭ СО РАН – Институт Археологии и этнографии  
Сибирского отделения Российской академии наук (ロシア科学アカデミーシベリア支部考古学・民族学研究所)  
МУИС – Монгол улсын их сургууль (モンゴル国立大学)  
Ноб – Новосибирск (ノヴォシビルスク)  
СПб – Санкт-Петербург (サンクトペテルブルク)  
УБ – Улаанбаатар (ウランバートル)  
ШУТИС – Шинжлэх Ухаан Технологийн Их Сургууль(科学技術大学)

図版出典:

図1 著者作成  
図2~6 各図版は表1に\*で明示。  
図7,8 著者作成

参考 1. 匈奴大型墓 (T 字形墳) とそれに付随する衛星墓の放射性炭素年代測定値<sup>(8)</sup>

OxCal v4.4.2 Bronk Ramsey (2020); r:5 Atmospheric data from Reimer et al (2020)

